

『釈軌論』における 阿含經典の語義解釈法（２）

上 野 牧 生

はじめに

本稿は『釈軌論』（*Vyākhyāyukti*）第一章「一語の中に多義がある場合の語義解釈」箇所^①の翻訳研究であり、前稿（上野 [2010]）の続編である。この箇所では、説一切有部が伝承した阿含經典に含まれる語彙の中から、*vigata* (*vīta*), *rūpa*, *anta*, *agra*, *loka*, *āmiṣa*, *bhūta*, *pada*, *dharma*, *prahāṇa*, *nyāya*, *karmānta*, *skandha*, *saṃgraha* の14術語が解釈例として取り上げられ、複数の意味をもつ一単語を註釈する場合の模範例が提示されている。前稿では *rūpa* から *pada* までの試訳を掲載した。本稿では *dharma* 以下の試訳を掲載する。

1 『釈軌論』第一章「語義」（１）試訳（続）

1.9 *dharma* (LEE 21.5-22.3; D śi 36a4-b2; P si 40b2-41a2)⁽¹⁾

dharma は、①所知〔と〕、②道と、③涅槃と、④意〔根〕の対象〔と〕、⑤福德〔と〕、⑥現世と、⑦聖教と、⑧生〔と〕、⑨勸戒と、⑩慣習〔の意味〕⁽²⁾で〔用いられる〕。

dharma という語は、

①「所知」(*jñeya)〔の意味〕では、「およそ有為であれ、無為であれ、諸法の中で最上のものは、離染であると語られる」(ye kecid dharmāḥ saṃskṛtā vāsa-

mśkr̥tā vā virāgas teṣām agra ākhyāyate⁽³⁾) と説かれている如くである。

②「道」(*mārga)〔の意味〕では、「比丘たちよ、邪見は非法であり、正見は法である⁽⁴⁾」と詳述されている如くである。

③「涅槃」(*nirvāṇa)⁽⁵⁾〔の意味〕では、「法に帰依いたします」(*dharmaṃ śaraṇaṃ gacchāmi)⁽⁶⁾と説かれている如くである。

④「意〔根〕の対象」(*manogocara)〔の意味〕では、「法処」(*dharmāyatana)と説かれている如くである。そ〔の法〕は意〔根〕のみの対象である。ただ対象であるのみであって、所依⁽⁷⁾(*āśraya)ではない。

⑤「福德」(*puṇya)〔の意味〕では、「〔国王は〕眷族である王妃や王子らと共に福德(法)を勤修〔する〕⁽⁸⁾」と詳述されている如くである。

⑥「現世」(*iha/aihika)〔の意味〕では、「現法において経験すべき〔業〕」(dṛṣṭadharmavedanīyam)⁽⁹⁾、「愚者は現法に執著する」と説かれている如くである。

⑦「聖教」(*pravacana)〔の意味〕では、「この世で比丘が法を知る、すなわち契経や応頌や」(*iha bhikṣur dharmaṃ jñātīti tadyathā sūtraṃ geyam)⁽¹⁰⁾と詳述されている如くである。

⑧「生」(*bhāvin)〔の意味〕では、「諸行の本質は、その〔ような〕特徴(*dharma)⁽¹¹⁾をもつ」と説かれたり、同じく、すなわち、「この身体は、老いという特徴をもつもの(*jarādharmā)である」と説かれている如くである。

⑨「勸戒」(*niyama)〔の意味〕では、「比丘の四法」と説かれている如く、同じく「比丘たちよ、殺生は非法なり。殺生を離れることは法なり。」⁽¹²⁾と説かれている如くである。

⑩「慣習」(*niti)〔の意味〕では、「地域の法や部族の法」⁽¹³⁾と説かれている如くである。

1.10 *prahāṇa* (LEE 22.4-20; D śi 36b2- 5; P si 41a2- 6)

prahāṇa は、①廃棄と、②〔流れを〕断つことと、③〔世間道による〕鎮静と、④随眠を〔ただしく〕調伏した〔などの意味で用いられる〕。

**pradhāṇa* などの *prahāṇa* は二〔種ある〕と〔経に〕説かれる。

prahāṇa と〔いう語〕は、

①「廃棄」(**utsṛṣṭa*)〔の意味〕では、「莫大な、あるいは僅かであっても財産の蓄えを棄てて」(*prabhūtaṃ vāpam vā dhanaskandhaṃ prahāya*)⁽¹⁴⁾と説かれている如くである。

②「流れを断つ」(**vigata-srota*)〔の意味〕では、「悪しき、不善なる法が既に生じてしまった場合は、〔それを〕断ずるために〔意欲を起こす〕」(*utpannānāṃ pāpakānāṃ akuśalānāṃ dharmāṇāṃ prahāṇāya*)⁽¹⁵⁾と説かれている如くである。

③「世間道による鎮静」〔の意味〕では、「諸欲〔の対象〕に対する欲望を鎮めて、そ〔の鎮静〕とともにしばしば時を過ごし、梵〔天〕界〔の神々〕と種を同じくする状態（同分）に生まれ変わった」(*kāmeṣu kāmaccandaṃ prahāya tadbahulavihārī brahmalokasabhāgatāyāṃ upagataḥ*)⁽¹⁶⁾と説かれている如くである。

④「随眠をただしく調伏した」(**anuśayasamāhata*)〔の意味〕では、「三結を調伏して、預流となる」(*trayaṇāṃ saṃyojanānāṃ prahāṇāt srotaāpanno bhavati*)⁽¹⁷⁾と説かれている如くである。

同様に、断による断 (*prahāṇaprahāṇa*)、律儀による断 (*saṃvaraprahāṇa*)、防護による断 (*anurakṣaṇāprahāṇa*)、修習による断 (*bhāvanāprahāṇa*)⁽¹⁸⁾がある。声聞⁽¹⁹⁾に向けて解説された二つの経では、二種に分類される。

1.11 *nyāya* (LEE 22.21–23.20; D śi 36b5–37a3; P si 41a6–b4)

nyāya (*tsul*)⁽²⁰⁾ という語は、①諦と〔八支聖〕道と縁起〔と〕、②明と、

③〔順〕決択分と、④涅槃〔と〕、⑤方便と、⑥規範性〔の意味〕で用いられる。

〔*nyāya* という語は、〕

①この、「諦と、八支〔聖道〕と、〔縁〕起」という摂頌 (**uddānagāthā*) では、聖者の理 (*nyāya*) という語が、諸諦や、〔八支聖〕道や、縁起〔の意味〕で〔用いられている例〕もみられる。

- ②「諸明」(*vidyāḥ)〔の意味〕で〔用いられている例〕もみられる。「バラモンよ、わたしは、この聖者の法律においては、聖者にとっての三つの理⁽²¹⁾(nyāya)でもって、三明を語る」と説かれている如くである。こ〔の同じ経〕で〔説かれている如く〕である。
- ③「順決択分」(*nirvedhabhāgiya)〔の意味〕では、「誰であれ四念処と整合しない者たちは、聖者の理(*nyāya)に対し、そ〔の理〕と整合しないのであ⁽²²⁾る」と説かれている如くである。
- ④ *nyāya* という語は、「涅槃」(*nirvāṇa)〔の意味〕もみられる。「在家者〔であれ〕、あるいは出家者〔であれ〕、誰であれ正しく行ずれば、その者は、無上なる理法(nyāyaṃ dharmam anuttaram)を得るであろう」と説かれている如くである。
- ⑤「方便」(*upāya)〔の意味〕もみられる。「方便という精進(*nyāyavīrya)〔から〕出発すれば、為しがたいことはなにもない」と説かれている如くである。
- ⑥「規範」(*vidhi)〔の意味〕では、「〔世尊の声聞僧伽は、よく修行しており、〕正しく修行しており、」⁽²⁴⁾(nyāyapratipannaḥ)と説かれている如くである。

1.12 *karmānta* (LEE 23.21-24.14; D śi 37a3-7; P si 41b4-42a2)

karmānta は、①資産を求めること(仕事)と、②三つ〔を離れることと〕、③七つを離れること〔の意味〕でも用いられる。

karmānta と〔いう語〕は、

- ①「資産を求めること(仕事)」〔の意味〕では、「彼がもし、農〔業〕(*kṛṣi[karmānta])〔をなし〕、もし商業(*vāṇijyakarmānta)や〔その他〕あれこれをなすならば」と説かれている如くである。
- ②「三つを離れること」(*triprahāṇa)〔の意味〕でも用いられる。「世間的な正業とは何か」(*laukikaḥ samyakkarmāntaḥ katamaḥ)と詳細に説かれ、乃至「〔命の〕ある限り、殺生を離れ、殺生から退くのである」(yāvaj[jīvaṃ] prāṇātipātaṃ prahāya prāṇātipātāt prativirato bhavati)。同様に、「欲望〔の対象〕に対する誤った行動(欲邪行、邪淫)から〔退く〕」(*kāma mithyācārāt [prativirato bhavati])と

説かれている如くである。

③「七つを離れること」(*saptaprahāṇa)〔の意味〕でも用いられる。「正業の完成とは何か。殺生を離れ、殺生から退くのである」に至るまで、また同様に、「輕薄な話(綺語)から〔退く〕」(saṃbhinnapralāpāt [prativirato bhavati])⁽²⁶⁾に至るまでに説かれている如くである。

④ *karmānta* という語は、「〔五〕無間」(*ānantarya, 〔五〕逆)〔の意味〕でも用いられる。「誤った行為〔には〕際限がない」と〔世尊が〕仰ったからであり、「この法律に違背して、害してはならないのは、五つの人物である。母殺し⁽²⁷⁾と、」と經に詳述されているゆえに。それらの誤った行為の極限が、行為の際限(**karmānta*)であり、五無間である。そのうち、誤った行為には際限がないから、誤った行為の際限(**mithyākarmānta*)である。そ〔の行為〕の本質は、誤った行為の無際限性なのである。

1.13 *skandha* (LEE 24.15-25.1; D śi 37a7-b2; P si 42a2-5)

skandha は、①集積と、②肩〔と〕、③〔樹の〕幹〔と〕、④一部〔の意味〕で〔用いられる〕。

skandha と〔いう語〕は、

①「集積」(**rāsi*)〔の意味〕では、「そのすべてを一つにまとめて、色蘊という名を得る」(tat sarvaṃ aikadhyam abhisamkṣipya rūpaskandha iti samkhyāṃ gacchati)⁽²⁸⁾、また、同じく「莫大な財の集積を成して過ごす」(mahāntaṃ dhanaskandham abhinirjityādhyāvasati)⁽²⁹⁾と説かれている如くである。

②「肩」(**aṃśa*)〔の意味〕では、「例えば、ある人が、地面から踏み台の上に乗って、馬の上から象の肩(hastiskandha)⁽³⁰⁾に乗る」と説かれている如くである。

③「〔樹の〕幹」(**druma*)〔の意味〕では、「根をもち、幹をもつ、大きな樹」(mahāvṛkṣasya mūlavataḥ skandhavataḥ)⁽³¹⁾と説かれている如くである。

④「一部」(praccheda)〔の意味〕では、「三回に分けて借金を払いましょう」(tribhiḥ skandhair deyaṃ dāsyāmaḥ)⁽³²⁾と説かれている如くである。

1.14 *saṃgraha* (LEE 25.2-22; D śi 37b3- 6; P si 42a5-42b3)

saṃgraha は、①そのものと、②〔そのものに〕資するものと、③歓喜と、④退失することのない〔法〕〔と〕、⑤包含と、⑥保持するもの、との六つの意味がある。

〔*saṃgraha* という語は、〕

①「そのもの」(*svabhāva)⁽³³⁾〔の意味〕では、「色蘊は、十処と〔第十一処である法処の〕一部分(=無表色)に包摂される(*saṃgrhīta)⁽³⁴⁾」と説かれている如くである。

②「そのものに資するもの」(*svabhāvānukūlya)⁽³⁵⁾〔の意味〕では、「聖者にとっての八支道は、〔戒・定・慧の〕三蘊に包摂される(*tribhiḥ skandhair āryāṣṭāṅga-mārgaḥ saṃgrhitaḥ)⁽³⁶⁾」と説かれている如くである。

③「歓喜」〔の意味〕では、「四摂事」(catvāri saṃgrahavastūni)と説かれている如くである。

④「退失することのない〔法〕」(*aparihāṇa)〔の意味〕では、「これは、それら五つの根をまとめたものである(*saṃgraha)⁽³⁷⁾。すなわち、慧根」と説かれている如くである。

⑤「包含」(*antarbhāva)〔の意味〕では、「如何なる動物、畜生に堕ちた息物であれ、そのあらゆる足跡は、大象の足跡に包含され、含まれる(*saṃgraha)⁽³⁸⁾」と説かれている如くである。

⑥「保持するもの」(*dhāraṇa)⁽³⁹⁾〔の意味〕では、「およそ大殿堂の如何なる棟木であれ、それらの中で最上のものは、梁である。すなわち、〔棟木を〕保持するためである(saṃgrahāya)⁽⁴⁰⁾」と説かれている如くである。

以上は、例を述べたに過ぎない。

以上のように、一つ〔の語〕の中に多く〔の語義〕があるのである。ある〔語〕についてある〔語義〕が妥当するならば、そ〔の語〕についてそ〔の語義〕を述べるべきである。

(未完)

「語義」(1) のまとめ

以上のようにヴァスバンドゥは、当該術語の用例を網羅的に収集して、それらを一括して示し、それぞれの経句の文脈に即した語義を指摘する手法を採る。そして用例の探索された範囲は、阿含から律に及ぶ。引用例がほぼすべて、説一切有部に属する阿含や律(すなわち仏説)に特定されるはずである。かかる特徴は、拙稿で取り上げた13の術語のみならず、拙稿では取り上げなかった(山口 [1959: 171-174] ; 宮下 [1983a: 10-12] では取り上げられている) *vigata* (*vīta*) にも共通する。

おそらくヴァスバンドゥは、仏説の中に確認される、当該語の主要な語義(同義異語)を列挙したのではないだろうか。用例を収集する範囲を仏説に限定しなければ、さらに多くの語義(同義異語)を提示することはおそらく可能であろう。しかしそうした選択はなされていない。ヴァスバンドゥはあくまで、仏説に見出すことができる語義に限定して、用例を集めたと推測される⁽⁴¹⁾。そして、かかる用例の中に大乘經典からの引用例が一例も見出されない点は、『釈軌論』全体における大乘仏説論の位置づけを考える上でも、留意すべきであろう。『釈軌論』製作時において既にヴァスバンドゥが大乘家に「転向」していたのであれば、あるいは既に大乘者であったのであれば、大乘經典を素材とした方法論の構築を目指したはずである。しかしそうした選択はなされていない。繰り返しになるが、解釈例として引用されるのは阿含と律のみなのである。

『釈軌論』におけるヴァスバンドゥの意図が大乘の宣揚にないことは明白である⁽⁴²⁾。
ろう。

以上が「語義」(1) 一語の中に多義がある場合の語義解釈であるが、『釈軌論』における語義解釈法は、これのみに留まらない。本稿が取り上げた箇所を引き続き、(2) 多語の中に一義がある場合の語義解釈例(第一章末尾)が、続いて(1)と(2)の方法論によっては整合的に解釈しえない用例の語義解釈が、実に103例も取り上げられる(第二章全体)。それらは本稿の続編において取り上げる。

Appendix A alam の語義解釈

『釈軌論』第一章に位置する「目的」(prajojana) 議論箇所最後の最後部では、「目的」を説明する際の解釈例として取り上げられた二例の経文(後述)に含まれる *alam* という語の語義解釈が提示されている。その語義解釈の提示の仕方は、本稿が取り上げた「一語の中に多義がある場合の語義解釈」とまったく軌を一にする。そのため、ここで付論としてその試訳を掲載する。

alam (LEE 12.5-26; D śi 32b4-33a2; P si 36a6-b5)⁽⁴³⁾

alam というこの語は、

- ①「可能」(*śakti)〔という意味での用例〕もみられる。「この道も知り得ない、見得ない」(ayam api mārgo nālaṃ jñānāya, nālaṃ darśanāya)⁽⁴⁴⁾と。「不可能である」「できない」という意味である。
- ②「制止」(*vāraṇa) という意味で〔の用例〕もみられる。「大王よ、ともあれ、私にしたことは、乃至、心の清浄さはもう充分です」(alaṃ mahārājā kṛtaṃ etāvad yāvad eva cittam abhiprasannam)⁽⁴⁵⁾、「一切の造作はもう充分です」(sarvasaṃskārā yāvad alam eva)⁽⁴⁶⁾と。
- ③「装飾」(*bhūṣaṇa) という意味で〔の用例〕もみられる。「腐敗した身体が飾り付けられ、アイシャドウが塗られると、新しい絵画のようである」(aṅjanīva navā citrā pūtikāyo hy alaṃkṛtaḥ)⁽⁴⁷⁾と。
- ④「当然」(*yukti) という意味で〔の用例〕もみられる。「將軍よ、汝が疑うのは当然だ。疑念を抱くのは当然だ。」と。「疑念を抱くべき状況で、疑念は起こるのだから」⁽⁴⁸⁾。
- ⑤「厭離するのがよい。離染するのがよい。解脱するのがよい。」(alaṃ ... nirvettum, alaṃ viraktum, alaṃ vimoktum)⁽⁴⁹⁾とは、「相応しい」(*paryāpti) という意味である。こ〔の「目的」において取り上げた第一の経片〕⁽⁵⁰⁾においても、「実習するのがよい」(alaṃ yogāya) とは「相応しい」の意味であるとみなすべきである。

第二の経片の説は、現在と、過去と、未来と〔人と〕の交わりに関して、三句が〔あると〕知られるべきである。それ〔ら〕を、よろこび、堪能し、妙喜するからである。「断をよろこび、」(*⁽⁵²⁾prahāṇārāmaḥ) というそ〔の経片〕についても同様である。

〔以上で〕「目的」を説明し終えた。

Appendix B 『雑阿含経』 第270経

概要

この付論では、*saṃgraha* ⑤⑥の出典と推測される、『雑阿含経』第270経の平行経典（説一切有部に属する *Samyuktāgama*, *pañcopādānaskandhika* の一経典）に関する、チベット語訳テキストとその和訳、及び漢訳・チベット語訳対照資料を提示する。

当該経典は『釈軌論』第二章にて取り上げられる経典であるため、ここで第二章について簡潔に触れておく。「語義」（3）に該当する第二章は、従来の研究によってその詳細が判明していない唯一の箇所である。その内容は、全103例からなる語義解釈の実例である。解釈例となる103例の経文は有部阿含が出典であり、具体的には *Samyuktāgama* からの引用が最も多く、次いで *Dirghāgama*, *Madhyamāgama*, *Ekottarikāgama* が続く。それらの経文は「語義」（1）,（2）,（4）の語義解釈法によっては整合的に解釈しえない特殊な用例である。そしてそれらの用例がひとつずつ解釈の俎上に載せられてゆく。したがって第二章の解読は、変則的で多岐にわたる語義解釈の手法、あるいは個々の経文・経句に対するヴァスバンドウの解釈（理解）を知りえる点で重要である。一方で分量的にも、第二章は『釈軌論』の中で最大の分量を誇る。註釈者グナマティも、第二章に限っては全用例に註釈を施している。以上の点から、第二章は『釈軌論』最大の眼目とみなしうる。

さらに第二章に関しては、『釈軌論』の姉妹文献である『釈軌論の百の経片』（*Vyākhyāyuktisūtrakhaṇḍasāta*, 以下『百経片』）との関連が見逃せない。『百経

片』は、『釈軌論』に引用された経文と同一出典の経文を羅列した引用集である。引用経文は全109例あり、最初の1例は『釈軌論』第一章冒頭に、残りの108例は第二章に引用される経文である。なお第二章(103例)と『百経片』(108例)とで引用数が異なるのは、第二章にて引用されつつ解釈対象とされていない経文も、『百経片』に含まれている(引用されている)からである。『百経片』所引経文の引用範囲は、多くの用例では『釈軌論註』と一致するものの、しかし相違する例もまた少なくない。さらに『百経片』『釈軌論』『釈軌論註』に引用される経文間には異読も多い。したがって『百経片』は、『釈軌論』あるいは『釈軌論註』から所引経文のみを抽出して作成された文献ではない。『百経片』はいずれかの阿含に基づいている。かかる点から、『百経片』は『釈軌論』(特に第二章)学習用の阿含引用集であったと推測される。

そしてこの付論で取り上げるのは、筆者による『百経片』の通し番号では SKhŚ no.66にあたる經典である。『釈軌論註』第二章の第61経(D si 205a2-b5; P i 76a2-b7)と平行する。この經典は『釈軌論』ではごく一部が引用されているのみであるが(VyY LEE 99.22-101.24)、『百経片』と『釈軌論註』とではその大部分が引用されている。本稿ではこのうち『百経片』に引用された經典(SKhŚ no.66)のみを取り上げる。理由はSKhŚ no.66と『釈軌論註』第二章第61経との間には細かな異読を除けば大きな相違がないからであり、しかし他方で『釈軌論註』所引經典群が『釈軌論』所引經典群と同じ有部阿含である確証はないからである(本稿の注no.36を参照)。

「無常想」を主題とするこの經典は、『雜阿含經』第270経およびSN 22.102(= SN III 155-156, aniccasañña)に平行する(本庄良文教授(佛教大学)のご教示による)。後掲の対照資料にて示したように、第270経はSKhŚ no. 66とよく一致する。なおCHUNG[2008]に第270経の記載はない。第269経と第271経とに平行するGāndhārī対応経がSenior Kharoṣṭhī Fragmentsに含まれているが(GLASS[2007])、第270経の対応経は回収されていない。

また当該經典は、『瑜伽師地論』『撰異門分』(*Paryāyasamgrahaṇī*)においても註釈対象として取り上げられ、各経句の各語義が註釈されている(D 75(10))

No.4041, hi 33b1-34a4; P No.5542, yi 39b5-40b2; T1579, vol. 30, 765b11-c8)。その註釈内容は『釈軌論』第二章におけるヴァスバンドゥによる註釈内容と少し異なるものの、引用された経句のチベット語訳はほぼ一致する。ただし『百経片』『釈軌論』『釈軌論註』所引経文に含まれない幾つかの経句が「撰異門分」では引用・註釈されているため、「撰異門分」の編者と、ヴァスバンドゥ・グナマティとが参照していた原典は異なっていたと推測される。いづれにせよ「撰異門分」の記述が SKhŚ no.66の理解を資助することに間違いはない。

さらに当該経典は、大乘『涅槃経』に要約的に引用されている。先行研究は特定に至っていないが（下田 [1993: 151-152: 172-174, ns. 31, 33]）、チベット語訳の大乘『涅槃経』第四章に *glan po che'i rjes lta bu'i mdo*（『大象の足跡の如きという経』）との名称で引用されているのは当該経典である。

チベット語訳テキストとその和訳

SKhŚ no.66チベット語訳テキスト⁽⁵³⁾

[1] dge sloṅ dag mi rtag pa'i 'du
¹⁾ śes sgoms śig dge sloṅ dag mi rtag
 pa'i 'du śes kun tu bsten ciñ
 bsgoms la lan mañ du byas pa dañ
²⁾ / bgrod par byas / rten du byas /
 [G32a1] nan tan du byas śin [C22a1]
 śin tu rdzogs par byas la / legs par
 brtsams pa ni 'dod pa'i 'dod chags
 thams cad yañ dag par 'joms śin /
 gzugs kyi 'dod chags thams cad
 dañ / gzugs med pa'i 'dod chags
 [N22b1] thams cad dañ / rgod pa

SKhŚ no.66和訳

[1] 比丘たちよ、無常想を修せよ。
 比丘たちよ、無常想⁽⁵⁴⁾ (*anityasaṃjñā)
 によく親しみ⁽⁵⁵⁾ (*āsevita), 修習し⁽⁵⁶⁾ (*bhā-
 vita), 繰り返し〔修習し〕⁽⁵⁷⁾ (*bahulikṛta),
 精通し⁽⁵⁸⁾ (*yānikṛta), 熟練し⁽⁵⁹⁾ (*vastukṛta),
 重んじ⁽⁶⁰⁾ (*anuṣṭhita), 完全にし⁽⁶¹⁾ (*susamā-
 pta), よく実行した者は⁽⁶²⁾ (*susamāra-
 bdha), 欲貪すべてを正しく破り,
 色貪すべてと、無色貪すべてと、掉
 挙と、慢と、無明すべてとを正しく
 破る⁽⁶²⁾ (*samavahati)。

1) sgoms DC : bsgoms PNG.

2) bgrod DCPG : 'grod N.

dañ / ña rgyal dañ / ma rig pa
thams cad yañ dag par 'joms te /

[2] dper na khyim bdag žiñ pa
dbyar 'das nas ston gyi dus kyi tše
gšol³⁾ chen pos žiñ rñams rmed ciñ
rmed pa na ram pa'i rtsa rgyus
thams cad gcod par byed / kun tu
gcod⁴⁾ par byed / mñon du gcod par
byed pa de bžin du / dge sloñ dag
mi rtag [D22b1] pa'i 'du šes kun tu
bsten⁵⁾ ciñ sñā ma bžin du [P24b1]
ña rgyal dañ / ma rig pa'i bar du
yañ dag par 'joms so //

[3] dge slon dag dper na mi
rtswa bal ba dza brña ba žig⁷⁾ gis
rtswa⁸⁾ bal ba dza chuñ žiñ ñuñ la
mi mañ ba šas šig mchog ma nas
bzuñ ste / sprug ciñ bar bur thams
cad sel bar byed pa de bžin du /
mi rtag pa'i 'du šes kun tu bsten¹⁰⁾
ciñ žes bya ba nas / ña rgyal dañ /
ma rig pa'i bar du yañ dag par
'joms¹¹⁾ so //

[2] 例えば、家長である農夫が、
夏（雨期）が過ぎた秋の時期、大き
な鋤でもって耕地を耕せば、草の菱
すべては切断され、完全に切断され、
鮮やかに切断されるように、比丘た
ちよ、無常想に親しみ、先と同様、
慢と、無明に至るまでを正しく破る。

[3] 比丘たちよ、例えば、バルバ
ジャ草を刈る人が、少しの、多くは
ない〔量の〕バルバジャ草の束を先
端から掴んで、〔刈り抜いて、空中
に〕振り払い、〔草の間にある夾雑
物〕すべてを取り除くように、無常
想によく親しみ、ないし、慢と、無
明に至るまでを正しく破る。

3) gšol DC : bšol PNG.

4) gcod DC : sbyod PN : spyod G.

5) bsten D : bstan C : brten PNG.

6) dza DCPG : za N.

7) gis DC : gi PG : om. N.

8) bal DCPG : om. N.

9) žiñ DPNG : žig C.

10) bsten DNCG : bstan P.

11) 'joms DCPG : 'jom N.

[4] dper na śiñ¹²⁾ thog a mra'i¹³⁾ dog
 pa la a mra gañ ci yod pa de thams
 cad¹⁴⁾ ni rtsa rgyus dañ ldan pa /
 rtsa rgyus la brten¹⁵⁾ pa / rtsa rgyus
 dañ 'brel pa / rtsa rgyus su 'du ba
 / rtsa rgyus dañ ma bral ba dag
 yin žiñ de dag las 'byuñ ba yin pa¹⁶⁾
 de bžin du / mi rtag pa'i 'du śes
 kun tu bsten¹⁷⁾ ciñ ste sña ma bžin
 no //

[5] dper na gtsañ khañ phyur
 bu'i phyam [G32b1] dgu po gañ ji
 sñed pa de dag thams cad ni spyi¹⁸⁾
 rten la gnas / spyi rten la brten /
 spyi rten la rag las / spyi rten la
 gžol bas / spyi rten ni de rnams
 kyi mchog yin par bstan¹⁹⁾ te / 'di lta
 ste / kun tu 'dzin pa'i phyir ro //

de bžin du mi rtag pa'i 'du śes
 kyañ sña ma bžin no //

[6] dper na srog chags dud 'gro'i
 skye gnas su gtogs pa'i 'gro ba
 rnams kyi rjes gañ ji sñed pa de²⁰⁾
 dag thams cad glañ po che'i rjes su
 'dus śiñ khoñs su chud pas / glañ
 po che'i rjes ni de rnams kyi

[4] 例えば、アームラ果の樹にあ
 る如何なるアームラ〔果〕であれ、
 それ〔ら〕のすべては、茎をもつも
 の、茎に依っているもの、茎と接合
 しているもの、茎と結合しているも
 の、茎を離れていないものなのであ
 って、それらから生ずるものである
 ように、無常想によく親しみ、〔以
 下は〕先と同様である。

[5] 例えば、大殿堂の如何なる棟
 木であれ、それらすべては、梁に設
 置され、梁に寄りかかり、梁とつな
 がれ、梁にもたれかかっている。ゆ
 えに、梁はそれらの中で最上のもの
 であると言われる。すなわち、〔棟
 木を〕保持するためである。⁽⁶⁵⁾

そのように、無常想も、先と同様
 である。

[6] 例えば、如何なる息物、畜生
 に属する動物たちの足跡であれ、そ
 れらすべては、大象の足跡に包含さ
 れ、含まれる。ゆえに、大象の足跡
 はそれらの中で最上のものであると
 と言われる。すなわち、〔最も〕大き

12) thog DC : thogs PNG.

13) dog DC : dogs PG : illegible N.

14) cad DCPG : om. N.

15) brten NG : brtan DPC.

mchog tu bstan te / 'di lta ste /
che ba ñid kyi phyir ro //

de bzin du mi rtag pa'i 'du ses
kyañ sña ma [C22b1] bzin no //

[7] dper na 'dzam bu'i gliñ du
'bab chu gañ ji sñed pa de dag
thams cad ni rgya mtśor gźol ba /
rgya mtśor 'bab pa yin / rgya
mtśor bab pa yin pas / rgya mtśo
ni de rnam s kyi mchog yin par
bstan te / 'di lta ste / kun tu sdud
pa'i phyir ro //

de bzin du mi rtag pa'i 'du ses
kyañ sña ma bzin no //

[8] dper na gnam las ñi ma śar
[N23a1] ba ni gnam la yog pa'i mun
pa thams cad 'od kyis zil gyis
[P25a1] mnan nas / lham me lhan
ne lhañ ne'o //

de bzin du mi rtag pa'i 'du ses
kyañ sña ma bzin no //

[9] dper na 'khor los sgyur ba'i

(66)
いからである。

そのように、無常想も、先と同様
である。

[7] 例えば、ジャンプ州におけ
る如何なる河川であれ、それらすべ
ては、大海に向い、大海に流れ、大
海に流れ込む。ゆえに、大海は、そ
れらの中で最上のものであると言わ
れる。(67)
すなわち、集まってくるため
である。

そのように、無常想も、先と同様
である。

[8] 例えば、空にのぼる太陽は、
空に遍満する闇すべてを、光線によ
って破って、光り、熱し、輝く。(68)

そのように、無常想も、先と同様
である。

[9] 例えば、転輪王は、およそ如

16) yin pa DC : om. PNG.

17) bsten DC : brten PNG.

18) dag DC : om. PNG.

19) bstan DCPG : bsten N.

20) kyi DC : om. PNG.

21) kyañ DC : om. PNG.

22) mtśor bab DC : mtśo 'bab PNG.

23) bstan DCPG : bsten N.

24) yog PG : yogs DC : yag N.

25) kyis PNG : kyi DC.

26) sgyur DCPG : bsgyur N.

[D23a1] rgyal po ni khams kyi rgyal po gañ ji sñed pa de rnams kyi mchog yin te / 'di lta ste / dbaṅ byed pa ñid kyi so //

de bzin du mi rtag pa'i 'du śes kun tu bsten²⁷⁾ ciñ bsgoms la lan mañ du byas pa dañ / bgrod par byas / rten du byas / nan tan du byas śiñ śiñ tu rdzogs [G33a1] par byas la / legs par brtsams pa ni 'dod pa'i 'dod chags thams cad yañ dag par 'joms śiñ / gzugs kyi 'dod chags thams cad dañ / gzugs med pa'i 'dod chags thams cad dañ / rgod pa dañ / ṅa rgyal dañ / ma rig pa thams cad yañ dag par 'joms so //

[10] sdom ni /

ziñ pa dañ ni gres ma brña //
dog pa dañ ni spyi rten dañ //
rjes dañ 'bab chu ñi ma dañ //
brgyad pa rgyal po yin par 'dod //
ces bya ba dañ/

何なる地域の王であれ、かれらの中で最上のものである〔と⁽⁶⁹⁾言われる〕。すなわち、〔最も〕強力だからである。

そのように、無常想によく親しみ、修習し、繰り返し〔修習し〕、精通し、熟練し、重んじ、完全にし、よく実行した者は、欲貪すべてを正しく破り、色貪すべてと、無色貪すべてと、掉挙と、慢と、無明すべてとを正しく破るのである。

[10] 撰〔頌〕は、農民と、草刈り人、樹と、棟木と、足跡と、河川、太陽と、第八〔の喩え〕⁽⁷⁰⁾は王であると認められる。と。

27) bstan DC : brten PNG. Read bsten.

『雜阿含經』 第270經と SKhŚ no.66との対照

『雜阿含經』 第270經 (T2, 70c2-71a3)

[A] 如是我聞、一時佛住舍衛國祇樹給孤獨園。

[B] 爾時世尊告諸比丘、無常想修習多修習、能斷一切欲愛色愛無色愛掉慢無明。

[C] 譬如田夫、於夏末秋初、深耕其地、發芟斷草。如是比丘、無常想修習多修習、能斷一切欲愛色愛無色愛掉慢無明。

SKhŚ no.66 (再掲)

φ

[1] dge sloñ dag mi rtag pa'i 'du
śes sgoms sig / dge sloñ dag mi
rtag pa'i 'du śes kun tu bsten ciñ
bsgoms la lan mañ du byas pa dañ
/ bgrod par byas / rten du byas /
nan tan du byas śiñ śiñ tu rdzogs
par byas la / legs par brtsams pa
ni 'dod pa'i 'dod chags thams cad
yañ dag par 'joms śiñ / gzugs kyi
'dod chags thams cad dañ / gzugs
med pa'i 'dod chags thams cad dañ
/ rgod pa dañ / ña rgyal dañ / ma
rig pa thams cad yañ dag par 'joms
te /

[2] dper na khyim bdag žiñ pa
dbyar 'das nas ston gyi dus kyi tśe
gśol chen pos žiñ rnams rmed ciñ
rmed pa na ram pa'i rtsa rgyus
thams cad gcod par byed / kun tu
gcod par byed / mñon du gcod par
byed pa de bžin du / dge sloñ dag
mi rtag pa'i 'du śes kun tu bsten
ciñ sña ma bžin du ña rgyal dañ /
ma rig pa'i bar du yañ dag par

[D] 譬如比丘、如人刈草、手攬其端、舉而抖擻、萎枯悉落、取其長者。如是比丘、無常想修習多修習、能斷一切欲愛色愛無色愛掉慢無明。

[E] 譬如菴羅果著樹、猛風搖條、果悉墮落。如是無常想修習多修習、能斷一切欲愛色愛無色愛掉慢無明。

[F] 譬如樓閣、中心堅固、衆材所依、攝受不散。如是無常想修習多修習、能斷一切欲愛色愛無色愛掉慢無明。

'joms so //

[3] dge slon dag dper na mi rtswa bal ba dza brña ba žig gis rtswa bal ba dza chuñ žiñ ñuñ la mi mañ ba šas šig mchog ma nas bzuñ ste / sprug ciñ bar bur thams cad sel bar byed pa de bžin du mi rtag pa'i 'du šes kun tu bsten ciñ žes bya ba nas / ña rgyal dañ / ma rig pa'i bar du yañ dag par 'joms so //

[4] dper na šiñ thog a mra'i dog pa la a mra gañ ci yod pa de thams cad ni rtsa rgyus dañ ldan pa / rtsa rgyus la brten pa / rtsa rgyus dañ 'brel pa / rtsa rgyus su 'du ba / rtsa rgyus dañ ma bral ba dag yin žiñ de dag las 'byuñ ba yin pa de bžin du / mi rtag pa'i 'du šes kun tu bsten ciñ ste sña ma bžin no //

[5] dper na gtsañ khañ phyur bu'i phyam dgu po gañ ji sñed pa de dag thams cad ni spyi rten la gnas / spyi rten la brten / spyi rten la rag las / spyi rten la gžol bas / spyi rten ni de rnams kyi mchog yin par bstan te / 'di lta ste / kun tu 'dzin pa'i phyir ro //

[G] 譬如一切衆生跡、象跡爲大、
能攝受故。如是無常想修習多修習、
能斷一切欲愛色愛無色愛掉慢無明。

[H] 譬如閻浮提一切諸河、悉赴大
海、其大海者最爲第一、悉攝受故。
如是無常想修習多修習、能斷一切欲
愛色愛無色愛掉慢無明。

[I] 譬如日出、能除一切世間闇冥。
如是無常想修習多修習、能斷一切欲
愛色愛無色愛掉慢無明。

[J] 譬如轉輪聖王，於諸小王最上

de bžin du mi rtag pa'i 'du śes
kyañ śha ma bžin no //

[6] dper na srog chags dud 'gro'i
skye gnas su gtogs pa'i 'gro ba
rnams kyi rjes gañ ji sñed pa de
dag thams cad glañ po che'i rjes su
'dus śiñ khoñs su chud pas / glañ
po che'i rjes ni de rnams kyi
mchog tu bstan te / 'di lta ste /
che ba ñid kyi phyir ro //

de bžin du mi rtag pa'i 'du śes
kyañ śha ma bžin no //

[7] dper na 'dzam bu'i gliñ du
'bab chu gañ ji sñed pa de dag
thams cad ni rgya mtśor gžol ba /
rgya mtśor 'bab pa yin / rgya
mtśor bab pa yin pas / rgya mtśo
ni de rnams kyi mchog yin par
bstan te / 'di lta ste / kun tu sdud
pa'i phyir ro //

de bžin du mi rtag pa'i 'du śes
kyañ śha ma bžin no //

[8] dper na gnam las ñi ma śar
ba ni gnam la yog pa'i mun pa
thams cad 'od kyis zil gyis mnan
nas / lham me lhan ne lhañ ñe'o //
de bžin du mi rtag pa'i 'du śes
kyañ śha ma bžin no //

[9] dper na 'khor los sgyur ba'i

最勝。如是無常想修習多修習、能斷一切欲愛色愛無色愛掉慢無明。

[K] 諸比丘、云何修無常想修習多修習、能斷一切欲愛色愛無色愛掉慢無明。若比丘、於空露地、若林樹間、善正思惟、觀察色無常、受想行識無常。如是思惟、斷一切欲愛色愛無色愛掉慢無明。所以者何。無常想者、能建立無我想。聖弟子住無我想、心離我慢、順得涅槃。

[L] 佛說是經已、時諸比丘聞佛所說、歡喜奉行。

rgyal po ni khams kyi rgyal po gañ
ji sñed pa de rnams kyi mchog yin
te / 'di lta ste / dbaṅ byed pa ṅid
kyis so //

de bzin du mi rtag pa'i 'du śes kun
tu bsten ciṅ bsgoms la lan maṅ du
byas pa daṅ / bgrod par byas /
rten du byas / nan tan du byas śiṅ
śin tu rdzogs par byas la / legs par
brtsams pa ni 'dod pa'i 'dod chags
thams cad yaṅ dag par 'joms śiṅ /
gzugs kyi 'dod chags thams cad
daṅ / gzugs med pa'i 'dod chags
thams cad daṅ / rgod pa daṅ / ṅa
rgyal daṅ / ma rig pa thams cad
yaṅ dag par 'joms so //

ϕ

略号と参考文献

- C Cone (Co ne) blockprint edition of the Tibetan Tripiṭaka.
D Derge (sDe dge) blockprint edition of the Tibetan Tripiṭaka.
DĀ *Dirghāgama*.
G dGa'-ldan (or Golden) bsTan 'gyur. 『金写《丹珠爾》影印本』。中國民族圖書館整理, 天津: 天津古籍出版社, 1988f.
HONJŌ no. 本庄 [1984a] における『俱舍論』および『ウパーイカー』所依阿含の通し番号。
N Narthang (sNar thang) blockprint edition of the Tibetan Tripiṭaka.
P Peking (Kangxi 1717/20) edition of the Tibetan Tripiṭaka kept in the Otani University, Kyoto.
SHT Ernst WALDSCHMIDT et al., *Sanskrithandschriften aus den Turfanfunden*. Wiesbaden/Stuttgart: Franz Steiner Verlag, 1965ff.
SKhŚ no. 筆者が付した *Vyākhyāyuktisūtrakhaṇḍasāta* (SKhŚ) 所依阿含の通し番号。
SWTF Heinz BECHERT et al., *Sanskrit-Wörterbuch der buddhistischen Texte aus den Turfan-Funden und der kanonischen Literatur der Sarvāstivāda-Schule*. Göttingen: Vandenhoeck und Ruprecht, 1973ff.
T 高楠順次郎, 渡邊海旭 [編], 大正新脩大藏經。東京: 大正新脩大藏經刊行會, 1924-1932.
YBh *Yogācārabhūmi*.

一次文献

パーリ仏典の略号については *A Critical Pāli Dictionary* の Epilegomena に従う。

パーリ仏典は全て The Pāli Text Society 版を用いる。

- AKBh *Abhidharmakośabhāṣya* (Vasubandhu): Pralhad PRADHAN (Ed.), Patna 1967.
AKUp *Abhidharmakośatikopayikā* (Śamathadeva): D no.4094; P no.5595.
AKVy *Sphuṭārthā Abhidharmakośavyākhyā* (Yaśomitra): WOGIHARA Unrai (Ed.), Tokyo 1932-1936.
ArthavSū *Arthavinīścayasūtra*. Narayan Hemandas SAMTANI (Ed.), Patna 1971.
AVN *Arthavinīścayamibandhana* (Viryaśridatta): Narayan Hemandas SAMTANI (Ed.), Patna 1971.
Avś *Avadānaśataka*. Jacob Samuel SPEYER (Ed.), St. Petersburg 1902-1909.
BoBh *Bodhisattvabhūmi*. WOGIHARA Unrai (Ed.), Tokyo 1930-1936.
Divy *Divyāvadāna*. Edward Byles COWELL and Robert Alexander NEIL (Eds.), Cambridge 1886.
EĀ(Trip.) *Ekottarikāgama*. Chandrabhāl TRIPATHĪ (Ed.), Reinbek 1995.
MPS *Mahāparinirvāṇasūtra*. Ernst WALDSCHMIDT (Ed.), Berlin 1950, 1950, 1951.
Mv *Mahāvastu*. Émile SENART (Ed.), Paris 1882-1887.
Mvy(IF) *Mahāvīyutpatti*. ISHIHAMA Yumiko and FUKUDA Yōichi (Eds.), Tokyo 1989.

- NidSa *Nidānasamṣyukta*. Chandrabhāl TRIPĀṬHĪ (Ed.), Berlin 1962.
- PravrV(3) *Pravrajyāvastu*. Claus VOGEL and Klaus WILLE (Eds.), Göttingen 1996.
- PravrV(4) *Pravrajyāvastu*. Claus VOGEL and Klaus WILLE (Eds.), Göttingen 2002.
- Saṅg *Saṅgītisūtra*. Valentina STACHE-ROSEN (Ed.), Berlin 1968.
- SBhV *Saṅghabhedavastu*. Raniero GNOLI (Ed.), Roma 1977, 1978.
- SKhŚ *Vyākhyāyuktisūtrakhaṇḍasāta*. D no.4060; P no.5561.
- SSS *Saptasūryodayasūtra*. DIETZ [2007].
- TA *Abhidharmakośaṭīkā-tattvārthā-nāma* (Sthiramati): D no.4421; P no.5875.
- Uv *Udānavarga*. Franz BERNHARD (Ed.), Göttingen 1965.
- Uv(N) *Udānavarga* (Subaṣi). NAKATANI Hideaki (Ed.), Paris 1987.
- Uv(tib.) *Udānavarga* (Tibetan). Champa Thupten ZONGTSE (Hrsg.), Göttingen 1990.
- ViniŚS *Viniścayasaṃgrahaṇī* : D no.4038; P no.5539.
- VyY *Vyākhyāyukti* (Vasubandhu): Lee [2001] ; D no.4061; P no.5562.
- VyYṬ *Vyākhyāyuktiṭīkā* (Guṇamati): D no.4069; P no.5570.

二次文献

上野牧生

- 2010『『釈軌論』における阿含經典の語義解釈法（1）』『印度哲学仏教学』25: 71-84。
- 2011「古代インドにおける仏教經典解釋論の文献学的研究—『釈軌論』を中心として—」『公益財団法人三島海雲記念財団研究報告書』48: 143-145。

小谷信千代

- 2000『法と行の思想としての仏教』京都：文栄堂。
- 2008「新出梵本『俱舍論安慧疏』（界品）試訳」『大谷大学真宗総合研究所研究紀要』26: 21-28。

小谷信千代・本庄良文

- 2007『俱舍論の原典研究 睡眠品』東京：大蔵出版。

櫻部建

- 1969『俱舍論の研究 界・根品』京都：法藏館。

櫻部建・小谷信千代・本庄良文

- 2004『俱舍論の原典研究 智品・定品』東京：大蔵出版。

下田正弘

- 1993『藏文和訳『大乘涅槃經』（I）』東京：山喜房佛書林。

出本充代

1998「*Avadānaśataka* に挿入された阿含経」『パーリ学仏教文化学』11: 31-40。

平川彰

1988『法と縁起』東京：春秋社。

舟橋一哉

1987『俱舎論の原典解明 業品』京都：法蔵館。

細田典明

2003「『雑阿含経』道品の考察—失われた『雑阿含経』第25巻所収「正断相应」を中心に—」『東方学』105: 179-165。

本庄良文

1983a「シャマタデーヴァの俱舎論註—一品—」『南都仏教』50: 116-141。

1983b「シャマタデーヴァの伝える「大業分別経」と「法施比丘尼経」」『仏教文化研究』28: 95-112。

1984a『俱舎論所依阿含全表Ⅰ』京都：私家版。

1984b「シャマタデーヴァの俱舎論註—根品（7）—」『密教学研究』16: 1-16。

1985「阿含と俱舎論—界品（1）—」『密教学』20・21: 27-40。

1989『決定義経・註：梵文和譯』京都：私家版。

1991a「阿含と俱舎論—界品（3）—」『佛教研究』20: 107-123。

1991b「シャマタデーヴァの伝える阿含資料—世品（1）—」『佛教文化研究』35: 17-28。

1992「シャマタデーヴァの伝える阿含資料—世品（6）[51]～[75]—」『佛教研究』21: 77-97。

1993「シャマタデーヴァの伝える阿含資料—業品（1）—」『神戸女子大学紀要（文学部篇）』26: 169-185。

1995「玄奘譯『俱舎論』における「順」の意味」『仏教論叢』39: 3-8。

1997「シャマタデーヴァの伝える阿含資料補遺—智品（上）—」『神戸女子大学文学部紀要』30: 91-103。

2001「『釈軌論』第一章（上）世親の經典解釈法」『香川孝雄博士古稀記念論集：仏教学浄土学研究』京都：永田文昌堂，107-120。

前田亮道

2007「梵文研究：瑜伽論における国王論（資料編）」『松濤誠達先生古稀記念：梵文学研究論集』東京：大祥書籍，259-303。

松田和信

1984 「Vasubandhu における三帰依の規定とその応用」『佛教學セミナー』39: 1-16。

2006 「梵文長阿含の *Tridaṇḍi-sūtra* について」『印度学仏教学研究』54- 2: 984-977。

宮下晴輝

1983a 「アビダルマ教義学の一局面—『俱舍論』から『釈軌論』への展開例—」『大谷學報』63- 1: 1-16。

1983b 「俱舍論註釈書 *Tattvārthā* の試訳」『佛教學セミナー』38: 1-24。

1997 「有部の論書における自性の用例」『佛教學セミナー』65: 1-16。

室寺義仁

2003 「仏教的「一切」(sarva) と識別 (vijñāna) —世親の有部批判—」『東方学』105: 1-14。

2006 「『阿毘達磨俱舍論』における 'utsūtra'」『印度学仏教学研究』54- 2: 958-954。

山口益

1959 「世親の釈軌論について」『山口益仏教学文集』下, 東京: 春秋社, 1973, 153-188。

BOLLÉE, Willem B.

1986 “Le kūtāgāra ou de la maison des hommes au manoir dans l'Inde orientale et l'Asie du Sud-Est,” *Bulletin d'Études Indiennes* 4: 189-214.

1989 “The kūtāgāra or from men's house to mansion in eastern India and South-East Asia,” *Shastric Traditions in Indian Arts*, Vol. 1. Stuttgart: Steiner Verlag Wiesbaden GMBH, 143-149.

CHUNG, Jin-il (鄭鎮一)

2008 *A Survey of the Sanskrit Fragments Corresponding to the Chinese Saṃyuktāgama*. Tokyo: Sankibo Press.

COX, Collet

2004 “From Category to Ontology: The Changing Role of *Dharma* in Sarvāstivāda Abhidharma,” *Journal of Indian Philosophy* 32.5-6: 543-597.

DIETZ, Siglinde

2007 “The *Saptasūryodayasūtra*,” *Indica et Tibetica. Festschrift für Michael Hahn*, Wien: Universität Wien, 93-112.

ENOMOTO, Fumio (榎本文雄)

1989 “Śarīrāthagāthā: A Collection of Canonical Verses in the Yogācārabhūmi. Prat 1: Text,” *Sanskrit-Texte aus dem buddhistischen Kanon 1*. Göttingen: Vandenhoeck und Ruprecht, 17-35.

1994 *A Comprehensive Study of the Chinese Saṃyuktāgama. Indic Texts Corresponding to the Chinese Saṃyuktāgama as Found in the Sarvāstivāda-Mūlasarvāstivāda Literature*. Grant-in-Aid for Scientific Research(C), Kyoto: Kacho Junior College.

GLASS, Andrew

2007 *Four Gāndhārī Saṃyuktāgama sūtras : Senior Kharoṣṭhī Fragment 5*. Seattle: University of Washington Press.

HABATA, Hiromi (幅田裕美)

2007 *Die zentralasiatischen Sanskrit-Fragmente des Mahāparinirvāṇa-Mahāsūtra: kritische Ausgabe des Sanskrittextes und seiner tibetischen Übertragung im Vergleich mit den chinesischen Übersetzungen*. Marburg: Indica et Tibetica Verlag.

LEE, Jong Choel (李鐘徹)

2001 *The Tibetan Text of the Vyākhyāyukti of Vasubandhu, critically edited from the Cone, Derge, Narthang and Peking editions*. Tokyo: Sankibo Press.

LIU, Zhen (刘震)

2010 『禪定与苦修：関于仏伝原初梵本の発現和研究』上海：上海古籍出版社。

NANCE, Richard F.

2012 *Speaking for Buddhas: Scriptural Commentary in Indian Buddhism*. New York: Columbia University Press.

PEIPINA, Lita

2008 *The Pīṃgalātreyā sūtra of the (Mūla)sarvāstuvādins: its edition and study*. Master Thesis submitted to the University of Oslo, Spring 2008.

RAMERS, Peter

1996 *Die „Drei Kapitel über die Sittlichkeit“ im Śrāmaṇyaphala-sūtra, die Fassungen des Dighanikāya und Saṃghabhedavastu, verglichen mit dem Tibetischen und Mongolischen. Einführung, Text, Übersetzung, Kommentar*. Inaugural-Dissertation zur Erlangung des Doktorwürde, vorgelegt der Philosophischen Fakultät

der Rheinischen Friedrich-Wilhelms-Universität zu Bonn, 1996.

SCHMITHAUSEN, Lambert

1970 “Zu den Rezensionen des Udānavargaḥ,” *Wiener Zeitschrift für die Kunde Südasiens* 14: 47-124.

SKILLING, Peter

2000 “Vasubandhu and the *Vyākhyāyukti* Literature,” *Journal of International Association of Buddhist Studies* 23- 2: 297-350.

VERHAGEN, Pieter C.

2005 “Studies in Indo-Tibetan Buddhist Hermeneutics (4): The *Vyākhyāyukti* of Vasubandhu,” *Journal Asiatique* 293: 559-602.

VINĪTA, Bhikṣuṇī

2010 *A unique collection of twenty Sūtras in a Sanskrit manuscript from the Patola, Volume I,1. Editions and Translation*. Beijing: China Tibetology Publishing House; Vienna: Austrian Academy of Sciences Press.

注

- (1) 『釈軌論』当該箇所テキストが小谷 [2000: 112, n. 27] に、和訳が小谷 [2000: 41-42] にある。
- (2) 当該箇所では *dharma* の語義として10種が挙げられているが、『釈軌論』第五章ではさらに2種が挙げられている。その一方は当該箇所而言及されている *dharma* ㉦であるが、もう一方は当該箇所では挙げられてはいないものである（出典不詳）。第五章の記述を以下に引用する。VyY LEE 269.16-270.6:

g'zan yañ bstan pa yañ chos 'jes bya ste / ji skad du / ji lta na dge sloñ chos
śes pa yañ yin 'ze na / 'di la dge sloñ chos śes pa ni 'di lta ste mdo sde dan /
dbyaṅs kyis bśāḍ pa'i sde dan 'jes rgya cher gsuñs pa lta bu'o //

rigs pa yañ yin te / ji skad du / chos kyis chos tśol bar byed de / chos ma yin
pas ma yin no 'jes 'byuñ ba lta bu'o //

「また次に、『聖教』（*pravacana）も『法』と呼ばれる（= *dharma* ㉦）。例えば『どのようにして、比丘は、法を知るものであるのか。この世で比丘が法を知る、すなわち契経や応頌や』と詳細に説かれている如くである。

『道理』（*yukti）も『法』と呼ばれる。例えば『法を以て法を求め、非法を以て〔法を求めるの〕ではない』と説かれている如くである。」

- (3) 当該経片は『俱舍論』「根品」に引用されている（AKBh 93.4-5; HONJŌ no.2077）。平行資料については出本 [1998: 33] ; CHUNG [2008: 154] を参照。なおこの *dharma* ㉦は、前稿で取り上げた *agra* ㉠および *pada* ㉡と同一出典からの引用であ

る。

- (4) 『雑阿含經』第782經に平行箇所がある。T2, 202c4-6: 爾時世尊告諸比丘。有非法是法、諦聽善思、當爲汝說。何等爲非法是法、謂邪見非法、正見是法。
- (5) 『俱舍論』「業品」第32偈では、法宝に帰依することは涅槃に帰依することであると説かれている (AKBh 216.12-14; 舟橋 [1987: 180])。こうした点から、『釈軌論』当該箇所では *dharma* の語義の一つとして *nirvāṇa* が挙げられている。平川 [1988: 198] も併せて参照。
- (6) 当該経片は、ヴィーリヤシュリーダッタの『決定義經註』における、「法無礙解」の「法」を註釈する箇所て例示される「教示としての法」(*deśanādharmā*)、「行としての法」(*pratipattidharma*)、「果としての法」(*phaladharmā*)の三類型のうち、第三の例として挙げられる經文に一致する (AVN 276.2-277.2; 本庄 [1989: 144])。出典は不詳。なお『決定義經註』当該箇所とほとんど逐語的に一致する記述がヤショーミトラの『俱舍論疏明瞭義』「智品」(AKVy 652.14-19; 櫻部・小谷・本庄 [2004: 156-157])にも確認される。ただし文言が『決定義經註』と少しく異なり、*dharmam śaraṇam gaccheta* という命令形である。ヴィーリヤシュリーダッタとヤショーミトラはともに、この「果としての法」を「涅槃」と言い換えているが、これは『縁起經釈』(*Pratītyasamutpādayākyā*)における三帰依の規定に基づいている (松田 [1984: 3])。
- (7) *dharma* ④の説明内容は、『釈軌論』第三章における「答釈(5)」(VyY LEE 190.15-191.18; 室寺 [2003: 139-138])と同一である。したがって当該用例の出典は『順別処經』(*sKye mched so so ba'i mdo*)であろうか。
- (8) 『瑜伽師地論』「攝決択分中有尋有伺等三地」に引用された **Udayanasūtra* (仮称) に平行箇所がある。ViniS D zi 162b2-3, P zi 170a5-7: *rgyal po chos dan ldan žiñ chos la dga' chos la gnas la / btsun mo'i 'khor dan / g'zon nu rnams dan / gros grogs rnams dan / khrom gyi ru sna dan / groñ rdal gyi mi rnams(P om. rnams) dan / yul gyi mi rnams dan lhan cig tu sbyin pa dag sbyin pa dan / bsod nams dag byed pa dan / bsñen gnas la gnas pa dan / tsul khrims yañ dag par blañs nas 'dug pa gañ yin pa de ni de'i bsod nams phun sum tsogs pa žes bya'o //* ; 「攝決擇分中有尋有伺等三地」(No.1579), T30, 642c21-24: 若諸國王任持正法名爲法王。安住正法名爲大王。與內宮王子群臣英傑豪貴國人共脩惠施。樹福受齊堅持禁戒。是王名爲功德圓滿。(異訳である『王法正理論』(No.1615, 玄奘譯), T31, 859c26-29もほぼ同文)。

なお「攝決択分」に引用された当該經典の詳細については前田 [2007] を参照。

- (9) 用例多数。『俱舍論』「業品」に引用される経片に用例がある (AKBh 229.13; HONJŌ no.4067)。「順現法受業」(*dr̥ṣṭadharmavedāniyakarman*) とは、現法 (現世) における苦樂の受、あるいは現法における種々の異熟を齎す業のことである。『俱舍論』「業品」第50頌で定義されている (AKBh 229.17f; 舟橋 [1987: 261f])。SWTF Band II S. 479によれば、当該語の用例は SHT VII 1746 r2; v2にも確認される。
- (10) 『中阿含經』第1經「善法經」に平行箇所がある (T1, 421a17-18: 云何比丘爲知

法耶。謂比丘知正經、歌詠、)。パーリ平行經は AN 64.3 (AN IV 113.14-15: idha bhikkhave bhikkhu dhammaṃ jānāti suttaṃ geyyaṃ ...)。

当該経片は『釈軌論』第二章第103経 [= SKhŚ no.109] (VyY LEE 158.12-159.1.), および第五章 (VyY LEE 269.17-270.2, 本稿の注 no.2を参照) で引用される経片である。有名な経片であるため、ステイラマティの『俱舍論疏真実義』にも引用されている (TA D tho 22b7, P to 28a3-4; 小谷 [2008: 25])。

- (11) 『雜阿含經』第1076経に平行箇所がある。T2, 280b29: 此有爲諸行法應如是。
- (12) 『雜阿含經』第1060経に類似した記述がみられる (T2, 275c17-20: 爾時世尊告諸比丘、有非法、有正法。諦聽善思、當爲汝說。何等爲非法、謂殺生、乃至邪見、是名非法。何等正法、謂不殺生、乃至正見、是名正法。)。他部派の文献では *Mahāvastu* に類似した記述がみられる (Mv II 99.5-6: prāṇātipāto adharmo prāṇātipātavairamaṇo dharmo.)。
- (13) *Divyāvadāna* (Chap. 33, *Śārdūlakarṇāvadāna*) における次の用例と平行しているであろうか。Divy 625.13-15: tadyathā deśadharme vā nagaradharme vā grāmadharme vā nīgamadharme vā śūlkadharme vā āvāhadharme vā vivāhadharme vā pūrvakarmasu vā.
- (14) *Sanḥabhedavastu* 所収の *Śrāmaṇyaphalasūtra* 相当部に平行箇所がある (SBhV II 232.4-5; SHT VII, S. 267, Ergänzungen, Kat.-Nr. 807)。
- (15) 阿含經典にみられる定型表現ではあるが (SWTF Band III S. 223, s. v. pra-hāṇa), *Samyuktāgama* に属する *Prahāṇasūtra* (II) の一節と推測される。Cf. 細田 [2003: 175]; SHT V 1455+1457 (SHT VIII, Ergänzungen und Korrekturen, S. 205-206; SHT IX, S. 421): ... (prahāṇaprahāṇaṃ katarat* iha bhikṣur utpannānāṃ pāpakānāṃ akuśālānāṃ dharmānāṃ prahāṇāya cchandaṃ janayati vyāyacche vīryam ārabhate cittaṃ pragṛhṇāti pradadhāti. idam=ucyate prahāṇa)r(ahāṇaṃ); 『雜阿含經』第877経, T2, 221a24-26: 云何爲斷斷。謂比丘亦起已惡不善法斷、生欲方便精勤心攝受、是爲斷斷。
- (16) Divy 122.15-16; 224.28-29; MPS 34.164 (= *Mahāsudarśanasūtra* § 21); SBhV II 73.15-16; SSS 98.10-13 (HONJŌ no.3008) などに平行箇所がある。

ただし *Mahāparinirvāṇasūtra* と『ウパーイカー』『世間品』に引用される *Saptasūryodayasūtra* (HONJŌ no.3008) とでは brahmalokasya svabhāvatāyām であるのに対し、『釈軌論』所引経片およびその他の平行資料では brahmalokasabhāgatāyām である点で異なる。なお本庄 [1991b: 23] によれば、SSS の平行資料は『中阿含經』第8経「七日経」(T1, 428c-429c), パーリ平行経は AN 7.62 (= AN IV 100-106) である。さらに SHT VI (cf. IX, Erg.) 1267, recto z: ///(bra)hmalokasya svabhā/// に僅かに平行箇所がある (DIETZ [2007: 104])。

- (17) 「預流」の定義を説く定型表現である (AKVy 492.12-13他)。なお前注と同じ *Saptasūryodayasūtra* にも平行箇所がある (SSS 99.20-22)。
- (18) 当該箇所の記述は先に言及した *Prahāṇasūtra* (II) の一節をなぞらえたものと推測される。Cf. 細田 [2003: 174]; SHT V 1455+1457 (SHT VIII, Ergänzungen und

Korrekturen, S. 205-206; SHT IX, S. 421) : (prahāṇaprahāṇaṃ saṃvarapra)[h](ā)ṇaṃ a(nurakṣa)ṇāpra[h](ā)ṇaṃ bhāvanāpra[h](ā)ṇaṃ; 『雑阿含経』 第879経, T2, 221b 18-19: 一者斷斷。二者律儀斷。三者隨護斷。四者修斷。

- (19) ここでヴェスバンドゥが言及する「二つの経」とは、グナマティによれば、一方は『雑阿含経』第877経ないし第878経に対応する、*Samyuktāgama*, *Mārgavarga* の第1経ないし第2経であり、他方は『雑阿含経』第879経に対応する *Mārgavarga* の第3経である。『釈軌論註』においてグナマティが双方を対比的に引用している (VyYṬ D si 151a7f; P i 14b8f.)。

- (20) *tsul* の原語をめぐり、LEE [2001: 22] ; NANCE [2012: 141; 251, n. 38] は *naya* を想定したが、SKILLING [2000: 338, Appendix 3] ; VERHAGEN [2005a: 582, n. 82] は *nyāya* を想定した。後二者が正しい。

なお NANCE [2012: 138-148] では本文に付された注番号と文末注における注番号とがひとつづつずれている。そのため本文 p.144にある NAYA との見出しに付された注 no.37は、p.251の文末注 no.38に対応する。このずれは本文 p.138に注 no.25 との表記が誤って二つある点に起因するが、本文 p.148に注 no.47の表記を欠いていることから、奇しくも p.148, no.48以降ではずれが解消されている。

- (21) DĀ 26 *Ṭiṅgalātreya* 1.10に類似した記述がみられる。松田 [2006: 980(133).1-2] ; PEIPINA [2008: 48]: yan nv aham āryeṇa nyāyeṇārye dharmavinaye traividyaṃ prajñāpayāmi </>

PEIPINA [2008: 48] によれば、漢訳平行経は『雑阿含経』第886経 (T2, 223c22-28: 佛告婆羅門、我不以名字言説爲三明也。賢聖法門、説眞要實三明、謂賢聖知見、賢聖法律眞實三明。)、パーリ平行経は AN 3.58.2 (AN I 163.15-16: Aññathā kho brāhmaṇa brāhmaṇā brāhmaṇaṃ tevijjaṃ paññāpentī, aññathā ca pana ariyassa vinaye tevijjo hotī ti.) である。

- (22) 『雑阿含経』第608経に平行箇所がある。T2, 171a16-17: 爾時世尊告諸比丘、若比丘離四念處者、則離如實聖法。

- (23) 『釈軌論』チベット語訳の原文は以下のとおりである。VyY LEE 23.11-14:

khyim pa 'am rab tu byuñ ba'am // gañ žig yañ dag grub byed la //
des ni bla med tsul ñid kyi // chos ni kun tu thob par 'gyur //

Nidānasamyukta, PravṛV(3) 261.7-10に類似した記述がみられる。NidSa 5.39: ta-tra bhikṣur api samyakpratipadyamāna ārādhiko bhavati. ārādhayati nyāyaṃ dharmam kuśalam bhikṣuñy apy upāsako 'py upāsikāpi samyakpratipadyamāna ādhikā bhavati. ārayati nyāyaṃ dharmam kuśalam.

ただし『釈軌論』のチベット語訳では韻文として訳出されているのに対し、NidSa では散文である。さらに NidSa では upāsikāpi に相当する語が『釈軌論』所引韻文ではなく、同じく kuśalam に相当する一語が『釈軌論』では bla med (*anuttaram) と訳出されている。この点は『釈軌論』第二章(8)における引用例でも同様である (VyY LEE 45.15-16: de'i rigs pa'i chos ni bla na med pa kun tu 'thob par 'gyur ba ñid yin la ≈ AVN 250.7-251.1: sa vai ārādhako bhavati nyāyaṃ dharmam anut-

taram iti vacanāt)。

- (24) ArthavSū 46.3-4; Mvy(IF) no.1123; SHT IV 623などに平行箇所がある。SHT IV 623 Bl.41 V3-5: supratipanno bhagavata śrāvakasamgha nyāyapratipanno / rju-pratipanno sāmicipratipannaḥ anudharmacārī /

当該語は三宝のうち「僧」の定義用語であり、「僧」を主題とする『釈軌論』第二章第8経 (SKhŚ no.9) に含まれる経句である (VyY LEE 45.8)。

- (25) 『雑阿含経』第785経 (T2, 203b24-26: 何等爲正業世俗有漏有取轉向善趣。謂離殺盜婬。) に対応する『ウパーイカー』「業品」所引経片の中に平行箇所がある (HONJŌ no.4007; 本庄 [1993: 175-177])。CHUNG [2008: 178] も併せて参照。さらに *Saṅghabhedavastu* 所収の *Śrāmaṇyaphalasūtra* 相当部に類似した記述がみられる。SBhV II 228.8-12: yāvajjivam prāṇātipātaṃ prahāya prāṇātipātāt prativirato bhavati. adattādānam abrahmacaryaṃ mṛṣāvādaṃ paśunyaṃ pāruṣyaṃ sambhinnapralāpam abhidhyāvyāpādaṃ mithyādrṣṭiṃ prahāya mithyādrṣṭeḥ prativirataḥ syāt.

ただし *Śrāmaṇyaphalasūtra* で挙げられる不善業が① prāṇātipāta, ② adattādāna, ③ abrahmacarya, ④ mṛṣāvāda, ⑤ paśunya, ⑥ pāruṣya, ⑦ sambhinnapralāpa であるのに対し、『釈軌論』所引阿含では③が kāmamithyācāra である点で異なる。

- (26) Cf. SBhV II 233.1-5; RAMERS [1996: 82]: *sa sambhinnapralāpam prahāya sambhinnapralāpāt prativirato bhavati.* sa ca bhavati kālavādī bhūtavādī ... sambhinnapralāpāt prativirato bhavati. (RAMERS [1996: 86] に従って ** 内の一文を補う。この一文はギルギット写本にみられ、またチベット語訳に対応箇所があるものの、GNOLI Ed. では見落とされている。)

なお *karmānta* ②③は *bhūta* ②と同一出典である。

- (27) *Pravrajyāvastu* における次の用例と平行しているであろうか。PravV(4) 31.34-36: nāśayata yūyaṃ bhikṣavo mātṛghātakam pudgalam asmād dharmavinayāt* aprarohanādharmā bhikṣavo mātṛghātakam pudgalo 'smin dharmavinaye.

- (28) 当該経片は『俱舍論』「界品」に引用されている (HONJŌ no.1009)。AKBh 13.5-7: yat kiṃcid rūpaṃ atitānāgatapratyutpannam ādyātmikabāhyam audārikaṃ vā sūkṣmaṃ vā hīnaṃ vā prañītaṃ vā yad vā dūre yad vā antike tat sarvaṃ aikadhyam abhisamkṣīpya rūpaskandha itī samkhyāṃ gacchati itī vacanāt sūtre rāśyarthāḥ skandhārtha itī siddham. 『凡そあらゆる色、すなわち過去・未来・現在の、内・外の、あるいは粗雑なあるいは精細な、あるいは劣ったあるいは勝れた、あるいは遠いものあるいは近いもの、そのすべてを一つに集めて色蘊と名づける。』と経の中に説かれているから、蘊とは集積の意味であることが成立する。』(櫻部 [1969: 172] より訳文を抜粋)

本庄 [1985: 34-35] によれば、平行資料は『雑阿含経』第55経 (T2, 13b17: 彼一切總説色陰。), パーリ平行経は SN 22.48 (= SN III 47f.) である。CHUNG [2008: 64-65] も併せて参照。なお『釈軌論』当該箇所と全く同趣旨の記述が『決定義経註』(AVN 88.3-6; 本庄 [1989: 49-50]) にもある。

- (29) 『菩薩地』に平行箇所がある。BoBh 126.11-12: *yenālpakṛcchreṇa mahāntaṃ dhanaskandham abhinirjityādhyāvasati*.
- (30) 『雜阿含經』第1146經に平行箇所がある。T2, 304c18-19: 譬如有人登床跨馬、從馬昇象。; SHT V 1112, Verso 3: ... *tadyathā puru[s]. + ///*. 当該經片とは反対に「象の肩から下りる」内容の一節もある。T2, 304c26-27: 譬如有人從高樓下乘於大象、下象乘馬、下馬乘輿、下輿坐床。; SHT V 1112, Recto 3 (Cf. ENOMOTO [1994: 32]): (prā)sādād dhastiskandham avatared dhastiskandhād āsvapṛṣṭham āsvapṛ (ṣṭhāt) ///
- (31) *Nidānasamṃyukta* に平行箇所がある。NidSa 2.4; 2.7: *tadyathā mahāvṛkṣasya mūlavataḥ skandhavataḥ sāravataḥ ...*
- (32) 『俱舍論』「界品」に同一表現がある。AKBh 13.24-26: *pracchedārtho vā. tathā hi vaktāro bhavanti tribhiḥ skandhakair deyaṃ dāsyāma iti. tad etad utsūtram. sūtraṃ hi rāsyartham eva bravīti. yat kiṃcid rūpaṃ atītānāgataḥpratyutpannam iti vistaraḥ*. 「あるいは、〔skandha は〕『一部』の意味である。例えば、次のような言い方がある。『三回に分けて借金を払いましょう』と。これは經典からの逸脱である。というのも、『およそどんな色であっても、過去あるいは現在あるいは未来〔の色であっても〕』云々と〔先に引用した經片のように〕、經は『集積』の意味のみを語る。」
- ただし『ウパーイカー』「界品」では当該表現は經片とみなされていないため、何らかの慣用表現の可能性もあろうか。本稿の注 no.41 も併せて参照。
- (33) 有部論書における「自性」の用例を精査した宮下 [1997: 10] によれば、「自性」の概念は、(1) 法それ自身を意味するとともに、(2) 法の本質としての自相を意味する。ここでは(1) 法それ自身としての *svabhāva* を「そのもの」と訳した。*svabhāva* と *dharmasaṃgraha* との関係については宮下 [1983b: 2-4] [1997: 7-8]; Cox [2004: 558-565] も併せて参照。
- (34) 『順別処經』の一節であろうか。
- (35) 本庄 [1995: 8] が指摘するように、「隨順」と現代語訳されることの多い *rjes su mthun pa* (*anukūla*, *ānukūlya*, *anuloma*, *ānulomika*, *anuguṇa*, etc., 玄奘訳の「順」) は、「～に従う」という意味ではなく、「～に適している」「～のためになる」「～に資益する」「～を助成する」「～を齎す」「～の原因となる」という意味である。かかる点を勘案して、*saṃgraha* ② *raṇ bzin daṅ rjes su mthun pa* を「そのものに資するもの」と訳した。
- (36) 出典は **Bhikṣuṇīdharmadinnāsūtra* であろうか (櫻部 [1969: 171, n.2] を参照)。
『中阿含經』第210經「法樂比丘尼經」T1, 788c8-10: 法樂比丘尼答曰。非八支聖道攝三聚。三聚攝八支聖道。

バリー平行經は MN 5.4(= MN I 299.1-305.4)。『俱舍論疏真実義』にも同一箇所の引用例があり (TA D tho 66b6; P to 80a4), さらに『ウパーイカー』「界品」には当該經典の全文が引用されている (HONJŌ no.1005, 和訳は本庄 [1983b: 105-111])。『釈軌論』所引箇所は本庄 [1983b: 106] に対応する。『釈軌論註』では当該經典

の一節が引用されているが (VyYṬ D si 151b5-152b1; P i 15b7-16b3 ≡ AKUp D ju 8a2-7; P tu 8b1-6), グナマティ所引の経片は、シャマタデーヴァ所引の経片とかなり異動がある。こうした例が『釈軌論註』にしばしば散見されることから、グナマティ所引の阿含は有部阿含ではない可能性が窺われる。

(37) 『雑阿含経』第654経に平行箇所がある。T2, 183b20-21: 此五根、一切皆爲慧根所攝受。

(38) 『雑阿含経』第270経 (T2, 70c15-16: 譬如一切衆生跡、象跡爲大、能攝受故。) に平行箇所がある。さらに『釈軌論註』第二章第61経にも引用されている (VyYṬ D si 205b1-2; P i 76b1-2)。詳細については本稿の Appendix B を参照。

(39) kūṭāgāra については BOLLÉE [1986] [1989] および VINITĀ [2010: 23, na] に示される諸研究を参照。

(40) 『雑阿含経』第270経 (T2, 70c13-14: 譬如樓閣、中心堅固、衆材所依、攝受不散。), および *Ekottarikāgama* に平行箇所がある。EĀ(Trip.) 14.22; 14.32: tadyathā (a) yāḥ kāścīt kūṭāgāre sopānasyaḥ sarvās tāḥ kūṭaṃgamāḥ kūṭānīśritāḥ kūṭapratibaddhāḥ kūṭāvasaraṇāḥ / (b) kūṭās tāsām agra ākhyāto yaduta saṃgrahāya //

この一節は *saṃgraha* ⑤と同じく『釈軌論註』第二章第61経にも引用されている (VyYṬ D si 205a7-b1; P i 76a8-b1)。詳細については本稿の Appendix B を参照。

(41) ただし、唯一の例外として、仏説に由来しない用例を、僅かながら含む可能性も捨てきれない。最後の例として挙げられる *skandha* ④では、『俱舍論』「界品」(AKBh 13.24-26) においても「経典からの逸脱」(utsūtra) として処理される “tribhiḥ skandhakair deyaṃ dāsyāmaḥ” (「三回に分けて借金を払いましょう」) との一節が挙げられる。『ウパーイカー』「界品」では言及されていないため、なんらかの慣用句である可能性も否定できない。なお『俱舍論』当該箇所における utsūtra については室寺 [2006: 957] を参照。

(42) この点については上野 [2011: 144-145] において少しく論じた。

(43) 『釈軌論』当該箇所の和訳が山口 [1959: 168]; 本庄 [2001: 116-117] にある。

(44) *Saṅghabhedavastu* に平行箇所がある (SBhV I 98.31; 104.13-14; 107.1-2)。SBhV I 98.31: ayam api mārgo nālaṃ jñānāya, nālaṃ darśanāya, nālaṃ anuttarāyai samyaksambodhaye.

LIU [2010: 46] によれば、SBhV I 97.4-108.10は DĀ 20 *Kāyabhāvanā* の一部 (20.45-20.155) と平行している。そして SBhV I 98.31は *Kāyabhāvanā* 20.68と平行している (LIU [2010: 164])。

(45) *Saṅghabhedavastu* に平行箇所がある。SBhV II 26.6-7: alaṃ mahārājā kṛtam etāvad yāvad eva cittam abhiprasannam.

(46) Divy 207.22-24; MPS 31.74; 48.14; SSS § 2 などに平行箇所がある。本稿の注 no.49を参照。

(47) Uv 27.25ab; 26ab に相当する。Cf. Uv(tib.) 27.23ab:

mig sman gyis ni gsal bris śiñ // rnag can lus ni brgyan pa yis //

なおここで、ヴァスバンドゥと *Udānavarga* (*Uv*) との関係について付言しておきたい。かつて SCHMITHAUSEN [1970] は、*Uv* の伝承に二つの系統があったことを論証した。すなわち東トルキスタン有部の伝えた旧伝承である第一系統 (BERNHARD Ed. に代表される) と、根本説一切有部の伝えた新伝承である第二系統 (チベット語訳 *Uv*, 『雑阿含経』『瑜伽師地論』『阿毘達磨集論』『摂大乘論』『阿毘達磨俱舍論』『阿毘達磨灯論釈』, Divy, Avś 所引の *Uv* 平行偈などに確認される) とである。さらにこの二系統に、スバシ写本 (*Uv*(N)) に代表される古写本系統 (カシュミール地方出身者に由来する『中阿含経』『出曜経』『阿毘曇毘婆沙論』など一致する) が先行する。そして、ヴァスバンドゥが承けたであろう伝承に関して SCHMITHAUSEN [1970: 109] は、『俱舍論』梵本 (PRADHAN Ed.) における用例に基づき、第二系統に属すると結論した。しかし、用例の収集範囲を『釈軌論』にまで広げた場合、異なる結論が得られる。上野 [2010: 78] で取り上げた *pada* ④は、第二系統ではなく、スバシ写本の読みに一致する。以下は『釈軌論』第一章の用例:

VyY **yud tsam yud tsam la ni yi chad ciñ nram par rtog pa rnam kyi dbañ du soñ** (VyY LEE 20.21-22)

Uv 11.7 **punaḥ punar** viśidet sa saṃkalpānaṃ vaśaṃ gataḥ //

Uv(tib.) 11.7 **yañ dañ yañ du** 'gyod pa yi // kun rtog dbañ du 'gro ba yi //

『雑阿含経』心随覺自在數數溺沈沒 (第600経, T2, 160c4)

Uv(N) no.128 **pade pade** viśidantaḥ saṃkalpānaṃ vaśaṃ gataḥ //

Pāli **pade pade** viśideyya saṃkappānaṃ vaśānugo // (SN I 7.16)

『釈軌論』当該箇所は *pada* という語を含む経文を例示する箇所であるため、チベット語訳 *yud tsam yud tsam la* の原文が *pade pade* であることに疑いはない。したがって、この用例に関しては第二系統 (チベット語訳 *Uv*, 『雑阿含経』) と一致しておらず、スバシ写本の読み (及びそれに対応するパーリニカーヤの読み) と一致していることがわかる。

一方, SCHMITHAUSEN [1970: 118] の結論を支持する用例もある。以下は『釈軌論』第五章における用例:

VyY **thos pas chos rnamśes par 'gyur** //

thos pas sdiḡ las ldog par 'gyur //

thos pas don med spoñ bar 'gyur //

thos pas mya ñan 'das pa 'thob // (VyY LEE 258.25-259.2)

Uv 22.6 śrutvā dharmāṃ vijānāti śrutvā pāpaṃ **na sevate** /

śrutvā hy anarthaṃ **varjayate** śrutvā prāpnoti nirvṛtīm //

Uv(tib.) 22.6 **thos pas chos rnam rnam par śes** //

thos pas sdiḡ las ldog par 'gyur //

thos pas don med spoñ bar byed //

thos pas mya ñan 'das pa 'thob //

Uv(N) 平行箇所なし

YBh śrutvā dharmam vijānāti śrutvā pāpān **nivarttate** /
śrutvā anarthaṃ **tyajati** śrutvā pāpnoti nirvṛtim //

(Śarīrārthagāthā 22, ENOMOTO [1989: 30-31])

この用例では、『釈軌論』所引韻文の読みは第一系統とは一致せず、チベット語訳 *Uv* や『瑜伽師地論』と、つまり第二系統とほぼ一致する。したがって SCHMITHAUSEN [1970: 118] の結論と同様の結果が得られる。

以上二点の用例から推測されるのは、ヴァスバンドゥが第二系統の伝承を承けつつ、それに加え、第二系統と親和性の高い古写本の伝承をも知り得ていた、ということである。さらに、漢訳『雜阿含經』はヴァスバンドゥ所引の *Samyuktāgama* よりも古い伝承を保つといわれるが、一方で『雜阿含經』は *Uv* 古写本よりも新しい伝承を伝え、最初の用例で示したように、ヴァスバンドゥの示す読みが古写本と一致する例もある。

- (48) SN IV 350.15-16; 399.16-17; AN I 189.6-7 などに類似した記述がみられる。AN I 189.6-7: alaṃ hi vo kālāmā kaṅkhituṃ alaṃ vicikicchituṃ kaṅkhaṇiye ca pana vo ṭhāne vicikicchā uppannā.

漢訳の対応資料においても『中阿含經』第16經「伽藍經」；第20經「波羅牢經」(T1, 447a22-23) などに類似した記述がみられる。第16經「伽藍經」, T1, 438c12-13: 世尊告曰、伽藍、汝等莫生疑惑。所以者何。因有疑惑、便生猶豫。

- (49) MPS 31.74: evam anityā vāsiṭṭhāḥ sarvasaṃskārā evam adhruvā evam anāśvāsikā evaṃ vipariṇāmadharm(ā)ṇaḥ sarvasaṃskārā yāvad alaṃ eva sa(r) vasa(m)skār(e)bhyo nirvett(u)m alaṃ vimoktum.

- (50) 「目的」における「第一經片」とは次の經文を指す。VyY LEE 11.9-10: sbyor bar bya ba ni rigs so // bag yod par bya ba ni rigs so // ston pa'i bstan pa la rnal 'byor du bya ba ni rigs so // 「実習するのがよい。不放逸なのがよい。大師の教えにおいて修するのがよい。」

Avadānaśataka に平行箇所がある (SWTF Band I S. 153, s. v. alaṃ も併せて参照)。Avś II 106.12-14: evaṃ svākhyāte me dharme uttāne vivṛte chinnaplotike yāvad devamanuṣyebhyaḥ samyaksuprakāśite yāvad alaṃ eva bhikṣavaḥ śraddhāpravrajitena kulaputrena alaṃ yogāya, alaṃ apramādaya, alaṃ śāstuḥ śāsane yogam āpattum ...

山口 [1959: 169, n. 4] はパーリニカーヤにおける類似表現の存在を指摘する。SN 12.22 (= SN II 29.16-18): evaṃ hi vo bhikkhave sikkhitabbaṃ attatthaṃ vā hi bhikkhave sampassamānena alaṃ eva appamādena sampādetum.

- (51) 「目的」における「第二經片」とは次の經文を指す。VyY LEE 11.12-14: kun dga' bo dge sloṇ 'du 'dzi la kun dga' ba dañ / 'du 'dzi la dga' ba dañ / 'du 'dzi la kun dga' ba'i sbyor ba la mñon par brtson žiñ gnas pa ni legs pa ma yin no // 「アーナンダよ、比丘が交わりをよろこび (*samsargārāma), 交わりをよろこび (*samsarga-rata), 交わりをよろこぶことに努め、精を出して時を過ごす (*samsargārāmatāyogam anuyukto viharati) のはよくない (*nālam)。」

山口 [1959: 169, n.5] はパーリニカーヤにおける類似表現の存在を指摘する。
AN 6.14 (= AN III 293.13-14): saṃsaggārāmo hoti, saṃsaggarato saṃsaggārāmatam
anuyutto, ...

- (52) この経片についてはグナマティが補足的に引用している。VyYT D si 144b6; P i
9a6: spoṇ ba la kun dga' ba dañ / spoṇ ba la dga' ba dañ / spoṇ ba la kun dga' ba'i
sbyor ba la rjes su brtson pa yin / 「断をよろこび、断をよろこび、断をよろこぶ
ことに努め、精を出す。」

当該箇所 の直接の出典ではないが、*Saṅgītisūtra* に類似した記述がみられる。
Saṅg IV.9(4): punar aparāṇ bhikṣuḥ pra(h)āṇarataḥ p(r)ahāṇārāmatāyogam anuyukto
bhāvanāra)to bhāvanārāmatāyogam a(nuyuktaḥ /)

- (53) *Vyākhyāyuktisūtrakhaṇḍasāta* D no.4060, śi 22a5-23a3; C śi 21b7-22b5; P no.5561,
śi 24a5-25a5; N no.3552, śi 22a6-23a4; G no.3560, śi 31b6-33a2 = vol. 66, p.13f.
(54) Mvy(IF) no.2330.
(55) Mvy(IF) no.2331.
(56) Mvy(IF) no.2332.
(57) Mvy(IF) no.2429.
(58) Mvy(IF) no.2430.
(59) Mvy(IF) no.2431.
(60) Mvy(IF) no.2424.
(61) Mvy(IF) no.2425.
(62) Mvy(IF) no.2432.
(63) 漢訳阿含における用例は『雑阿含経』第110経 (T2, 35b13-14: 譬如士夫刈拔芟草、
手執其莖、空中抖擻、除諸亂穢。)。パーリニカーヤにおける用例は AN III 365.1-3
他多数。
(64) パーリニカーヤにおける用例は AN III 365.4-6 他多数。
(65) Cf. EĀ(Trip.) 14.22; 14.32: tadyathā (a) yāḥ kāścīt kūtāgāre sopānasyaḥ sarvās
tāḥ kūṭamgamāḥ kūṭānīśritāḥ kūṭapratibaddhāḥ kūṭāvasaraṇāḥ / (b) kūṭas tāsām
agra ākhyāto yaduta saṃgrahāya //

漢訳阿含における用例は『雑阿含経』第882経 (T2, 222a9-10: 譬如一切屋舍堂閣、
以棟為第一。)。パーリニカーヤにおける用例は SN V 43.24-26; AN III 365.1-3;
AN V 21.25-27 他多数。

『釈軌論』第一章における「語義」(1), *saṃgraha* ⑥ とほぼ同文である。Cf.
VyY LEE 25.17-19: khañ pa brtsegs pa'i phyam dgu po gañ dag yin pa de dag gi
mchog ni spyi rten yin te / 'di lta ste / sdud pa'i phyir ro //

- (66) 逐語的には一致しないが、以下の類似資料がある。Cf. 『中阿含経』第141経「喻
経」, T1, 647c6-8: 猶諸獸跡、彼一切悉入象跡中、象跡盡攝、彼象跡者、為最第一、
謂廣大故。; HABATA [2007: 76-77, 12.9]: tadyathā kulaputra yāni kānicit padajātāṇi
tāni hastipade samavasaraṇaṃ gacchanti hastipadaṃ teṣām agryam ākhyāyate.

HABATA [2007: 76-77, Anm.3]によれば、パーリニカーヤにおける「象跡喻」

の用例は SN I 86.31-33; SN V 43.13-15; SN V 231.2-4; AN V 364.23-26; AN V 21.19-21. 漢訳阿含における類似表現は『雑阿含経』第882経, T2, 222a4-5: 譬如比丘、一切畜生跡中象跡爲上。

なお『釈軌論』第一章における「語義」(1), *saṃgraha* ⑤ とほぼ同文である。

Cf. VyY LEE 25.14-16: 'gro ba dud 'gro'i skye gnas su soñ ba'i srog chags gañ su yañ ruñ ba de thams cad kyi rjes ni glañ po che'i rjes su 'dus śiñ 'du ba yin no //

(67) 漢訳阿含における用例は『雑阿含経』第882経 (T2, 222b13-14: 譬如閻浮提一切衆流、皆順趣大海、其大海者最爲第一。)。パーリニカーヤにおける用例は AN V 22.18-21 他多数。

(68) 漢訳阿含における用例は『雑阿含経』第396経 (T2, 106c19-20: 譬如日出周行空中壞諸闇冥、光明顯照。)。パーリニカーヤにおける用例は SN V 44.22-25; AN V 22.14-17 他多数。

(69) 漢訳阿含における用例は『雑阿含経』第882経 (T2, 222a25-26: 譬如諸王轉輪聖王爲第一。)。パーリニカーヤにおける用例は SN V 44.13-15; AN III 365.7-9; AN V 22.7-10 他多数。

(70) この摂頌は、経の本文ではなく、SKhŚ の編集者によるものと推測される。